

萩原朔太郎全集

第三卷



萩原朔太郎全集

第三卷



筑摩書房

萩原朔太郎全集 第三卷

昭和五十二年五月三十日初版一刷發行
昭和五十六年六月三十日初版二刷發行

著者 萩原朔太郎

發行者 布川角左衛門

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二一八

電話(二九二)七六五一(營業)

(二九四)六七一一(編集)

振替口座 東京六一四一二三三

本文整版印刷 株式會社精興社

寫真整版印刷 株式會社東京美術印刷社

製本 株式會社製本印刷株式會社

(分類) 0392 (製品) 73503 (出版社) 4604

凡例

一、本全集は、萩原朔太郎の既発表、未発表を問わず、詩・短歌・俳句・アフォリズム・詩論・文明論・書評・序跋・書簡・各種ノート等にわたって、全業績を収録することを目途とした。

一、本巻（第三巻）は、雑誌・新聞に発表された詩作品で生前著者編纂の単行詩集に未収録の「拾遺詩篇」、原稿のまま残された「未発表詩篇」、及びこれらに關連した「草稿詩篇」を收め、また既発表未発表を問わず著者のすべての「短歌・俳句・美文」を收めた。収録は右の順とした。

一、「拾遺詩篇」「未発表詩篇」及び「草稿詩篇」は、それぞれ「詩篇」と「散文詩・詩的散文」とに分類し、「短歌・俳句・美文」も三部門に分け、それぞれ既発表のものは發表年代順に、未発表のものは推定可能な限り執筆年代順に配列した。

一、「草稿詩篇」には、本巻の「拾遺詩篇」「未発表詩篇」の草稿のほか、第二巻収録の「習作集第八卷・第九卷」の草稿を收めた。また、「原稿散逸詩篇」と「補遺」とを收めた。

一、本文は、「拾遺詩篇」はその雑誌・新聞初出形を、「未発表詩篇」は生原稿を底本としたが、正字正假名遣に統一した。

次のような場合、訂正した。

- 1 明らかな誤字・誤植・俗字・脱字
- 2 假名遣の誤り
- 3 踊り字（々、く）

次のような場合、原文のままとした。

- 1 著者獨得の用字・用語

例 戀魚、幹木、甚痛、炎燃、深酷、酸蝕、醋蝕、元子、珠根、僧主、風しん花、淫^よしい、いつさいに、

もえそめで、らうまちずむ、等

2 音象的表現

例 れうれう、いんいん、ぼうぼう、おーぼー、等

3 著者の造語とみられる語彙

例 透純、薰郁、嗅觸、熱想、蝕光、等

4 送り假名の送り過ぎ、送り足りないもの

例 新らしき、賢こい、輝やく、鋭どい、等

ただし、著しく不自然なものはこれを訂した。

5 外來語表記

例 ビアゼレ、アルチバセフ、ドストイエフスキイ、ドストエフスキイ、ノクチュールネ、のくちゆるね、

さんちまんだりずむ、えらんだ、えねちや、等

ただし、翻譯書名「カラマゾフ兄弟」「カラマゾフの兄弟」などはそのまましたが、「カラマゾフの兄弟」は「カラマゾフの兄弟」と訂した。

6 慣用表記

例 こゆむらさき、土べた、等

一、行あき、句讀點は初出形及び生原稿を尊重しつつも、行末の句讀點はなるべく各詩篇ごとに統一をはかった。

二、「拾遺詩篇」本文の下欄には雑誌・新聞に發表された初出形を収め、その雑誌・新聞の名稱、號數、發行年月(日)を附記した。

「未發表詩篇」は、同一詩篇章稿のうち最も完成に近いと思われる原稿に校訂を施したものを本文とし、當該原稿の元の形を初出形に準じてその下欄に収めた。

一、「拾遺詩篇」初出形は、俗字・假名遣の誤用・送り假名の過不足・誤字・誤植等を含めて、原形通りに轉載した。

「未發表詩篇」下欄に収めた原形も右に準ずるが、俗字・略字は正字に改めた。またここに用いた編集上の記號は「草稿詩篇」と同じである。（「草稿詩篇凡例」四二八頁參照）

一、右の初出形及び原稿原形が詩篇本文と異なる次のような場合には、當該文字の横に「・」を附して讀者の注意を喚起した。

1 俗字・略字・當て字等

例 讚・美・秘・密・七・兵・衛・唇・小・椽・日・南・等

ただし、原稿原形では俗字・略字は記載しなかった。

2 假名遣の誤り

例 倦・ん・づ・る・を・き・つ・邊・行・き・づ・り・老・ひ・た・る・等

3 誤字

例 莓・腦・む・繻・袴・肅・々・等

4 誤植

例 頌・ち・る・け・高・う・き・そ・ど・け・ど・も・等

一、ルビつきの漢字が誤字の場合は、そのルビの上または下に「・」を附した。

例 口・吻・艾・子・布・簾・等

一、脱字は當該箇所「」で補った。

例 家〔代〕々・堪〔へ〕んや・あざわら〔は〕れ・等

一、「短歌・俳句・美文」については、すべて右に準じた。

一、「草稿詩篇」のうち「原稿散逸詩篇」には、「小學館版」・「創元社版」全集に収録されたものもとの原稿の現存しないもの、及び轉寫されたものがありながらもとの原稿の現存しないものを収めた。また「補遺」には、第一卷に収録洩れの『青猫』中「黒い風琴」草稿、及び著者自身によって全文抹消された草稿、並びに一、二行の未完結の斷片草稿を収めた。

一、「拾遺詩篇」「未發表詩篇」「草稿詩篇」「短歌・俳句・美文」については、卷末に「解題」を附した。

目次

歡魚夜曲	四一
秋日行語	四三
郊外	四三
麥	四四
雨の降る日	四五
晚秋哀語	四六
からたちの垣根	四七
街道	四七
春の來る頃	四八
早春	四九
鐵橋橋下	五〇
春日	五一
黎明と樹木	五二
遠望	五三
浮名	五四
利根川の岸邊より	五五
幼き妹に	五七
初夏の祈禱	五八

交歡記誌	五九
供養	六〇
受難日	六一
瀧	六三
立秋	六四
偏狂	六五
若き尼たちの歩む路	六六
螢	六七
立秋	六八
岩魚	六九
旅上	七〇
畑	七一
決闘	七二
感傷の塔	七三
光る風景	七四
純銀の賽	七五
鑛夫の歌	七六
厩	七八

感傷品	一八
眞如	一八
和讃類纂	一八
月蝕皆既	一八
情慾	一八
磨かれたる金屬の手	一七
青いゆき	一八
蒼天	一八
靈智	一八
祕佛	一八
永日和讃	一八
きたる弾くひと	一八
巡禮紀行	一七
螢狩	一七
孝子實傳	一七
玩具箱	一七
冬を待つひと	一六
疾患光路	一六

合唱	一〇〇
岩清水	一〇一
山頂	一〇三
南の海へ行きます	一〇三
竹	一〇五
竹の根の先を掘るひと	一〇六
夜景	一〇七
たびよりかへれる巡禮のうた	一〇八
祈禱	一〇八
小春	一〇九
芽	一〇九
三人目の患者	一一〇
敘情小曲	一一一
もみぢ	一一二
春日詠嘆調	一一三
吹雪	一一四
諷詩	一一五
絶望の足	一一六

都會と田舎……………二七

酒場にあつまる……………二三

よき祖母上に……………二四

紫色の感情にて……………二七

我れ何所へ行かん……………二六

眺望する……………二九

別れ……………三二

春晝……………三三

祈禱……………三三

記憶……………三四

敵……………三五

近日所感……………三六

クリスマス……………三六

南京陥落の日に……………三七

廣瀬河畔を逍遙しつつ……………三九

父の墓に詣でて……………三九

昔の小出新道にて……………四〇

散文詩・詩的散文

SENTIMENTALISM……………四三

遊泳……………四七

秋日歸郷……………四九

感傷詩論……………五一

聖餐餘録……………五二

光の説……………五二

手の幻影……………五七

危険なる新光線……………五七

懺悔者の姿……………五八

鼠と病人の巢……………五九

言はなければならない事……………六三

握つた手の感覺……………六九

新人の祈禱……………七五

なつかしい微笑……………七九

青ざめた良心……………八〇

生えざる苗……………八三

ADVENTURE OF THE MYSTERY……………八六

二つの手紙	二四
坂	三三

大井町	三六
-----	----

未發表詩篇

未發表詩篇

○（悲しみにたへざる夕べである）	四八
○（さびしくてさびしくて町に出で）	四八
○（いのりをあげてわれはゆく）	四九
○（TANGO をどれ）	四九
空中樓閣	五二
月光	五三
センチメンタリズムの黎明	五三
○（さはつねに哀しく）	五五
○（菊のにはひをかきなれし）	五五
枝の印象	五五
静夜	五七

松	五八
涙	五九
○（ぼつくりふくらんだケシの珠根）	五九
○（しんねんたる柳の木立道ばたの）	六〇
行路	六〇
くろんぼ踊り	六一
○（元始 ^{はじめ} 、人が魚になる）	六三
みなその都會	六四
銀座の菊	六五
晩景	六六
蝕金光路	六八
顔	六九

室生犀星に……………二七〇

○（きみと居るとき）……………二七二

穴をもとむ……………二七二

祈禱……………二七三

月夜……………二七四

○（わたしどもの風俗は）……………二七五

○（戀人よ）……………二七六

群盜……………二七七

○（われふるさとの故郷にあるときは）……………二七八

○（散りすぎし山茶花の）……………二七九

○（よるに至りて哀しきことあり）……………二八〇

○（くいくやみ）……………二八〇

手の肖像……………二八一

○（心靈意識のための絶息する手淫が

ある）……………二八二

家……………二八三

道心……………二八三

○（にはとり鳴くと思ひきや）……………二八四

○（遠夜の空にかがやける）……………二八五

頌……………二八五

われの犯せる罪……………二八六

○（きのふけふ）……………二八六

○（そのありさまをみてあれば）……………二八七

○（このなんて納まり返つた人たちだ）……………二八八

○（わたしは凍え）……………二九〇

先祖……………二九〇

生活……………二九一

○（黒塗の光れる俵）……………二九一

○（日もうらかにはれわたる）……………二九二

憔悴せるひとのあるく路……………二九三

夕やけの路……………二九三

疾病……………二九四

○（懺悔するもののまへに月がある）……………二九五

○（光る銀の鐵砲だ）……………二九五

庭……………二九六

○（はかりかねたる汝の罪だ）	二六
金庫破り	二七
都市の進行	二七
○（いみじきみたまよ）	三〇
偉大なる懷疑	三〇
○（青火がもえる）	三〇
○（私が疾患スルトキ）	三三
穴	三四
夜	三五
信仰	三六
○（いまは日のくれかた）	三七
○（ああ石をとばせ おんみに）	三八
梢	三〇
鳥の巢の内部	三〇
○（太陽）	三二
われのみひとり立ちて	三三
○（わが肱かけ椅子は木製にして）	三四
窓	三五

○（指と指とをくみあはせ）	三六
罪の巡禮	三六
踊の印象	三七
○（のるうゑいの海のいはほに）	三八
○（坭だらけの両手をふつて）	三九
○（ふくらめうぐひすのこゑごゑ）	三九
春の夜の會話	四〇
戀を戀するひと	四三
○（をとめの色は白かつた）	四四
○（わたしはよだれをたらして）	四四
○（あたらしい旅がはじまつた）	四五
歩行して居る人の印象	四六
○（窓をひらけばいつばいのさくらだ）	四六
一の眞理	四七
○（ほんとにさびしいこのへんの森の 中では）	四八
森の中から	四九

○（快活なる女學生の群は）……………	三三〇
○（ああ鳥、鳥、空をすぎて）……………	三三三
○（樹のうへのあやかしをみよ）……………	三三三
○（わがみしところのものは聖なる柱 なりき）……………	三三四
筍……………	三三四
蛇つかひ……………	三三六
馬の眼の印象……………	三七七
月光の夜に見たる家屋の印象……………	三七七
病氣した	
海底……………	三八六
魚介……………	三八六
草の神經……………	三三九
晩景……………	三四〇
○（頭痛の原因をしらべるために）……………	三四二
○（しらが太夫の卵）……………	三四三
瓶……………	三四三
夜……………	三四四
○（なやましいみどりの中に）……………	三四五

遠き風景……………	三三六
○（ちつぽけな）……………	三七七
玻璃製の案山子……………	三八八
○（君とはあの緑の樹の下で別れた）……………	三八九
最後の奇蹟……………	三九一
炎天……………	三九三
○（浪路を越えて行くわつ浪浪悲 しげ）……………	三九四
○（夢みる）……………	三九四
○（さてなやましさと寂しさが彼を狂 氣せしめた）……………	三九五
○（つめたい藻ぐさのながれが）……………	三九五
○（せつないかわき切つた森の空氣だ）……………	三九六
○（わたしはわたしの罪をおぼえてゐ る）……………	三九七
硝子製煉場……………	三九八
鳥……………	三九〇